

んやお母さんの傍で仕合に暮して居りましたとさ
めでたし〜〜〜

机と硯と墨

と　よ　子

太郎さんは今年の四月尋常一年に上つた誠に〜
おとなしい勉強ずきのよいお子なのです。

朝も　おかあさんにもちつとも御世話をやかせず早
く起きてお行儀よくごはんをすまし御本の包を持
つてにこ〜と學校へ行かれますし又歸つてから
もおやつをたべてから一時間許りを本をさらつた
り御習字をしたりなさいますそれがまだお父
様もお母様も少さいのにあまり勉強するのはいけ
ないからと云つてお机もなんにも太郎さんには買
つてあげずに居ましたか毎日〜太郎さんが書生
部屋に行つては大きい高い机で勉強なさると云ふ
事を聞いてそれでは反つていけないからと御両親
が御相談なさつて太郎さんの爲に一つ丁度よい大

さの机や硯をかつて上げる事にしました。
そんなうれしい事があらふとは夢にも知らず太郎
は元氣よく唱歌を唱いながら歸つて来て

太郎おとうさんおかあさん「今」

と御あいさつしました

おとうさんにこ〜しながら

父「太郎さん今からすぐおとうさんと一所にい

つてあなたにい、机や硯を買つてあげませ

う」

とおつしやいしましたので太郎はうれしくて〜た
まらず早く行ましょ〜とせき立て、本郷の通ま
で夢中で來ましたをしてよい机と硯と墨と筆とを
買つていたいき喜び勇んでおうちへ歸り早速おか
あ様の御部屋へ置きました今迄とちがひ高さも丁
度よいしするので太郎はうれしくてたまらずぐ
墨をこくすつていろ〜の字や書を書きました
これからは毎日〜猶更一生懸命でおさらいして
居ますので墨はどん〜へり机もつひ筆を落して
墨がついたり石盤がぶつかつてぎづが出來たりし
始めました。

其内に學校も暑中休になりましたので太郎はお父様やお母様と田舎へ遊びに行き暫くおるすになりました。

ある日の事朝から日がかん／＼つて汗ばだら／＼流れ水も煮え立ちそうなる暑さ臺所では女中も屋眠りしジョンも椽の石でう／＼ねむつて居る頃机はちやんと立つたさきり頭の上には硯と墨や筆がのつて居るので重くて暑くてたまらずどうかして下りて貰いたいと思つて居ましたが其中たまらなく暑いのでからだを一つがたとゆすると筆はコロ／＼とこるげ落ちてしまいましたが硯は動きそうにもしませんでした。

机「硯さん／＼今は坊ちやんもおるすだし殊に今日は暑くて／＼たまらずあたまも少し横になつて休みたいのだから一寸の間下りて居て下さらないか」と頼みました硯もそれを聞いて

硯「どなたかと思つたら机さんでしたかあなたはそのうしてしぢう立つて居る許りで定しくたびれるでせうね私も暑くて／＼たまらなく

机

でも少しでもからだをまげて居るとおなべどんかに掃除の時に来ては無理に真直にして行かれどんなにつらひか分りませぬあなたのおつしやる通り坊ちやんのおるすの間だけでも御互に少し樂をしたいものですね「全くですよ私の坊ちやん位感心なよいお主人は少ないでせうね少さいのに私たちを大事に優しくあつかつて下さつて此間も石盤さんが一寸けつまづいてあ痛いとこぶちやないへこみが出来たと思ふとすぐ坊ちやんの柔い手でなせて下さるし筆さんがころんで私の頭へ墨でも付と柔い布でよくふいて下さるしほんと／＼よい御主人に使はれて何よりうれいのですからおるすの間少し休んで置いて又歸つていらしたらまた役に立ちたいと思ひますよねー硯さん」

硯「あなたはいはんと／＼によい心掛を持っておいでですれ私もふだん坊ちやんの勉強に感心して居ましたが實は坊ちやんまだ薄い／＼といつてごし／＼皆中をこすられるのでつら

くてくもをく 此次の世には決して硯などには生れないやう山の奥のく谷に住うと思つて居た位ですがなるほどあなた御話を聞けば私が我儘だつたのですね私もよい御主人を持たのを何よりの幸と思つて之から身をおしませずお役に立ちませう

と二つの物がしきりに話してゐるのを聞いて墨も心の中にぞうすると私なども運のいゝ方だおなじへるにも適直にへつて使へばすぐ拭いて下さるしすめば枕をしてねかして下さるし命の短いだけ私が一番らくなのだなと一人感心して居ました机「それでは硯さん少し下りて下さい私が少しからだを曲げますよソーラ静かにお下りなさいよソーラも少し」

と机がだんく横になりますと硯もそろくすべつて行きましたが頼がて皆横になつて「ア、ア是で樂になつた、何しろ牛れてから始めて横になつたのだろね、是れが僕等の暑中休みだ」と云つて皆暫く書寝をして今日の暑さを忘れて居りました。

此日はいつになく暑さで留守居の下女も堪らなくなつて是も書寝をして居ると見えて夕方迄と云ふものは家の中はしんとして唯何時も休まぬ時計が獨りでカチ／＼と云つて居る外誰れも話する人がありませんでした。頼がて夕方になつて一番先に目を覺したのが下女のお三どん

「ア、アい、必持であつた、オヤもう夕方になつた様だお湯でもわかつてそれから御飯の仕度もしなければならぬかな。

と云ひながらイロく臺所で働いて居りました坊ちゃん御座敷の連中も其内皆目を覺して「ア、アい、心持になつた」と云ひますと墨も筆も

「ほんとうにいつもく横になることの出来ぬと云ふものはつらいものですな。今日は久しぶりで樂々と休みました。」と話して居ました、之を聞いた下女のお三は

「オヤ誰れか御座敷に居るのかしら話聲がする様だ」と云ひながら頼がて臺所から手を拭きく

坊ちやんの座敷へ来て見ると此はしたりちやんと方付けて置いた筈の机や硯が横さまにひつくり返つて居ておまけに墨迄向ふの方にころがつて居りました。下女は

「誰だらう？仕様がないな。人の方付けて置くものを」

とぶつく／＼云ひながら半づ第一に机をドシンと元の通りに直はす其拍子に柱で机は足をユツンとぶつけられて「アイタ、」と云ひました。下女は平氣なものでズント手を伸ばして硯を捕へたかと思ふと机の上こがたんと置いたので硯と机とはいやと云ふ程な鉢合「アイタ」と云ふとたんに目から火が出た様でした。それが濟むか濟まない中向ふの方に居た墨も下女の驚つかみに合つて机の上に叩き置かれたので是もしたゝかに「アイタ、」を食ひました。是で三人とも元の通りになつてお互に顔見合せて

三人「痛かつたねー」と云つて居りました

おはり

會 告

會員諸君の御投稿を歓迎す。可笑しきもの面白きもの、有益なるもの、何れも可なり、文躰また何等の拘束なし。時に觸れ折に感せられたるもの何なりとも書き連ねて投せられたし。